

『論理学研究』の志向性理論における 「意味」と「充実化」

葛谷 潤¹

本稿の目的は、フッサール初期の主著である『論理学研究』（以下『論研』）における志向性理論に基づく基本方針に対するある懸念を、彼の充実化概念の意義を明らかにすることで払拭することである。

『論研』における志向性理論は、それぞれ良く知られた次の二つの考えに基づく。第一の考えは、表現を理解する作用の志向性は、その作用の関わる場所の意味、それもその表現の対象の与えられ方としての意味に存するというものである²。したがって志向性という概念の解明は、対象の与えられ方としての意味という概念の明確化という形で遂行される。第二の考えは、作用の志向性の説明を、その対象となる何らかの存在者への言及なしに行うというものである³。この二つから、『論研』における志向性理論の基本方針は、表現の対象の与えられ方としての意味という観念を、表現の対象となる何らかの存在者への言及なしに明確化することによって、作用の志向性を解明するというものであるということが分かる。

しかし、このような方針での志向性概念の解明は原理的に不十分なものとどまらざるを得ないのではないかと、という懸念がある。その懸念は、表現の対象の与えられ方としての意味という観念の明確な把握のためには、予め作用が関わる場所の存在者およびそれらと諸作用の間に成り立つ指示関係を確定するような理論構成が不可欠であるという考えに基づく。そのように考えられる理由は、対象の与えられ方としての意味とはまさに対象の与えられ方であるからである。『論研』のフッサールに対するこのような危惧の表明としては、フレーゲ研究で知られるダメットのものをあげることができる。ダメットは、彼が現象学的伝統との対話を試みた著作『分析哲学の起源』の中で、次のように述べる。

ある表現の意味とは、いかなる場合も、その表現の指示が与えられる仕方であ

1. 東京大学人文社会系研究科・日本学術振興会特別研究員 DC。本稿は文部科学省科学研究費（特別研究員奨励費）の交付を受けて行った研究成果の一部である。

2. XIX/1: 54–55 を参照。

3. XIX/1: 427 を参照。

るから、何が、またどのような種類のものが、所与の表現の指示を構成するのかを決定することは、その表現の意味を特徴付けるための決定的な最初のステップである。[…] 正しい指示の理論を得るまで、我々は意味の理論がとるべき形式について何の考えも持たない。(Dummett (1993: 53f.))

ここでダメットは、意味の理論を構築するためにはまず指示の理論を構築しなければならないと述べている。ここで指示の理論と呼ばれているものとは何かを一言で言えば、ある言語に属する任意の表現に対して、その表現が出現するその言語の任意の文の真理値を確定するためにその表現に割り当てられていなければならない必要十分な値とみなしうるもの（これがその表現の「指示」と呼ばれる）として、一定の数学的構造を組み込まれた領域の要素を体系的に割り当てるような理論である⁴。通常このような理論は、その表現が出現するその言語の任意の文の真理値を確定するためにその表現に割り当てられるべき値とは何かという理論的な観点から、原始的表現に一定のカテゴリの存在者を指示対象として割り当てるという作業をその一部として含む。ダメットの懸念は、『論研』にはこのような理論がないし、そもそもそれを一定の理論的な観点から構築しようとした形跡すらないので、彼の意味概念についての把握は曖昧なものにとどまらざるを得ないというものである⁵。

このような懸念に対して、『論研』に指示の理論を構築するための一定の理論的観点が存在するというを示すことで応えるという道もあり得る⁶。しかし、たとえ明確な理論的観点のもとで遂行されていようと、意味の解明のためにはまず諸表現に対してどのようなカテゴリのどの対象を割り振るかを決定しなければならないのだとすると、これがフッサールの志向性の解明のための第二の考えとどのように両立するかは明らかではない。議論のために、以下ではこの二つが両立しないことを前提したい。この場合、『論研』の基本方針に則りつつ『論研』に対する上記の懸念に答えるには、次のことを示すほかない。すなわち、指示対象に訴えることなしに、表現の対象の与えられ方としての意味という観念についての十分に明確な把握を持つことができるし、また『論研』のフッサールはそのような形で意味という観念を理解していた、ということがそれである。本稿の目的はこのことを、フッサールの充実化概念の意義を明確化することを通じて示すことである。

本稿の構成を予め示しておく。第一章において、フッサールは表現の対象の与えられ方としての意味という概念を、さらに充実化の仕方として分析していたこと、およびその概略を示す。ここにおいて、『論研』の基本方針に対する懸念は、本稿が「直接的表象」と呼ぶ諸表現の意味をいかに説明するかという問題に帰着すること

4. この点に関して詳しくは Dummett (1975: 120–122) を参照。

5. この点に関しては Dummett (1993: 52ff.) を参照。

6. この方針における重要な研究として、富山 (2008)、富山 (2010) がある。

が確認される。第二章において、この問題に対する一つの応答を提示し、フッサールの意味概念に対する基本的な把握もまたこれに沿ったものであるように思われることを示唆する。第三章において、第二章の議論が数学的言明の場合だけでなく、経験的言明にも同様に当てはまることを確認する。

1. 充実化の仕方としての意味

本章では、まず第六研究第一篇第三章の数名辞に関する議論を参照し、フッサールの充実化の仕方としての意味概念を確認する。その後、本稿が「直接的表象」と呼ぶ種類の表現において対象それ自体が与えられるということを前提とすれば、充実化の仕方としての意味概念が、表現の対象の与えられ方としての意味概念の明確化として理解できることを確認する。最後に、『論研』の基本方針に対する懸念は、直接的表象の意味をいかに説明するかという問題に帰着することが確認される。

まず、フッサールが数名辞の充実化に関して論じている箇所を確認しよう。フッサールは次のように述べる。

定義の連なりの中で展開する数学的な概念形成はどれも、その各項ごとに表意的な志向から成る一連の充実が可能であることを示している。我々は $(5^3)^4$ という概念を「 $5^3 \cdot 5^3 \cdot 5^3 \cdot 5^3$ という積を形成するならば生じるところの数」という定義的表象へ立ち帰ることによって明晰にする。もし我々がこの後者の表象をさらに明晰にしようと望むなら、 5^3 の意味へ、したがって $5 \cdot 5 \cdot 5$ という形成に立ち帰らねばならない。更に遡るなら、 $5 = 4 + 1$ 、 $4 = 3 + 1$ 、 $3 = 2 + 1$ 、 $2 = 1 + 1$ という一連の定義によって5を説明しなければならない。さらに我々は各段階のあとごとに、最後に形成された複合表現ないし思想への代入を遂行しなければならないだろう。そしてこの思想が何度でも再生可能であるとすれば（我々にとっては必ずしもそうでないとしても、それ自体としては確実に再生可能である）、我々は最終的に完全に解明された一の総和に到達する。そしてこれについて、これが $(5^3)^4$ という数「そのもの selbst」である、と言われる。明らかに最終結果にだけでなく、この数の一つの表現から、次にその表現を解明し内容的にそれを豊かにする表現へと移行する、一つ一つの段階にも、実際に充実化の作用が対応している。(XIX/2: 601)

ここで彼が充実化と呼んでいる、「 $(5^3)^4$ 」からの「一の総和」へ遡るプロセスが、いかなる意味で対象を与える仕方だと言えるのかを理解するためには、上の議論の前提となっている彼の数名辞に関する見解を踏まえる必要がある。

彼の数名辞に関する基本的なアイディアは、数名辞には基礎的な名辞と派生的な

名辞の区別があり、各々の派生的な名辞は基礎的な名辞からの一定の段階を経て構成されているというものである。具体的にはこれは次のようなものになる。まず 1 と、1 に後続者関数を有限回適用して得られる数からなる系列、すなわち自然数系列の各々の数を指示する名辞を「1」、「1+1」、「1+1+1」…という形で導入する⁷。本稿では便宜のために、これらの数名辞を「直接的表象」と呼ぶこととする。さらにこれらによって、 $2=1+1$ 、 $3=2+1$ 、 $4=3+1$ …といった仕方で順にアラビア数字を定義する⁸。このように導入されたアラビア数字上に、基本的な演算（加法、乗法、累乗）を順に定義する。これによって「 $5 \cdot 8$ 」や「 2^3 」といった名辞が導入されることになる。さて、直接的表象以外の、定義によって導入されるような数名辞をフッサールは「間接的表象 *mittelbare Vorstellungen*」（XIX/2: 601）と呼ぶので、本稿でも以下そのように呼ぶこととする。

以上を踏まえて、まずはフッサールが充実化と呼んでいるものが、何らかの表象から出発して、その構成の段階を遡って行って直接的表象へと至ることであることを確認しよう。まず、何らかの間接的表象は、その導入の仕方から明らかなようにどれもその構成の段階を持つ。これは逆にいえば、その構成を定義に従って（例えば 3^2 ならば「 3^2 」→「 $3 \cdot 3$ 」→「 $3+3+3$ 」→…と）段階的に遡っていくことで直接的表象へと引き戻すことができるということである。そして、フッサールはそのような遡行の各々の段階を充実化と呼ぶ⁹。したがって、充実化とは何らかの表象から出発して、その構成の段階を遡って行って直接的表象へと至ることである。

次に、フッサールが充実化の仕方のことを意味と呼ぶことを確認する。フッサールによれば、充実化のためには、問題の名辞の「意味へと […] 立ち返らなければならない」（XIX/2: 601）。つまり、意味に立ち返ることは、充実化のための仕方に立ち返ることである¹⁰。

7. これははじめの「1」に後続者関数記号（「+1」）を繰り返し適用した形に相当し、それゆえ「+」を単独で取り出しそれを加法演算記号と考えるべきではない。

8. アラビア数字をこのように導入するには、アラビア数字の十進法の記号体系に関する先行的な知識を持っていなければならない。ただ、彼の議論の本質的な部分は、アラビア数字を導入せずに演算を直接的表象に対して直ちに定義しても失われない。

9. 「間接的な志向はみな間接的な充実化を、それももちろん有限回のステップの後に、最終的にはある直接的な直観において終了するような間接的な充実化を、要求するという命題が妥当する」（XIX/2: 602）。「明らかに最後の答えにだけでなく、この数の一つの表現から、次にその表現を解明し内容的にそれを豊かにする表現へと移行する、一つ一つの段階にも、実際に充実化作用が対応している」（XIX/2: 601）。

10. このような、数名辞に対して基礎的な名辞と派生的な名辞の区別を設け、各々の派生的な名辞の意味を基礎的な名辞へと引き戻す手続きとして理解するというアイディアは、名辞の意味に関する彼の構成主義的な見解の現れである。例えば、洗練された構成主義的な形式的体系として知られるマルティン・レーフの直観主義的タイプ理論におけるカノニカル *canonical* な数と非カノニカル *noncanonical* な数という区別は、フッサールの直接的表象と間接的表象の区別と平行的なものである。この点に関しては Martin-Löf (1984: 7) を参照。このような、算

さらに、フッサールに従えば、充実化の仕方とは表現の対象の与えられ方である。フッサールによれば、間接的表象は段階を遡った際に生じる表象の対象として特徴付けられる数をその対象として指示する¹¹。「 2^2 」という間接的表象で考えてみよう。彼に従えば、この表現の対象は「 $2 \cdot 2$ 」の対象ということになる。しかし「 $2 \cdot 2$ 」もまた間接的表象である。したがって、「 2^2 」の対象は、「 $2 \cdot 2$ 」をもう一段階遡った場合に生じる表象「 $2 + 2$ 」の対象ということになる。このような遡行は、生じる表象が直接的表象になる段階まで続けられる。さてフッサールによれば、直接的表象（この場合であれば「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」）において、数そのもの（この場合であれば自然数4）が与えられる。したがって充実化とは、間接的表象の対象そのものが与えられることである。それゆえ、充実化の仕方とは、表現の対象の与えられる仕方である。

さて、充実化という概念を用いて意味概念を規定することは、表現の対象の与えられ方という曖昧な概念の明確化になっている。充実化という概念は、何らかの表象から出発して、その構成の段階を遡って行って直接的表象へと至ることとして理解されている。このことにより、充実化の仕方という概念は、少なくとも数名辞の場合においては、遡行に用いた手続きの列として表示できるものになっている。例えば、我々は「 2^2 」と「 $2 \cdot 2$ 」という二つの表現において異なる意味内容を把握する。さて、意味とは充実化の仕方なのだとしよう。すると、これら二つの表現の意味が異なることは、充実化の仕方が違うということであるが、この違いは充実化のために用いた手続きの列における違いとして表示することができる。例えば前者のプロセスにおいては累乗の定義に訴えた移行が登場するが、後者には登場しない。このような仕方で意味の違いを表示することは、充実化の仕方として意味を理解することで可能になっている。したがって、充実化という概念を用いて意味概念を規定することは、表現の対象の与えられ方という曖昧な概念の明確化になっている。

間接的表象は、上のような定義によって導入されるような表象、フッサールが「順演算」(XIX/1: 336)と呼ぶ種類の表象に加え、対象が満たす条件を定めることで導入されるような、彼が「逆演算」(XIX/1: 337)と呼ぶ種類の表象がある。例えば「 $15 - 11$ 」は、 $11 + x = 15$ という条件を満たす x の値を指すものとして考えられている¹²。この場合に問題の直接的表象へとたどり着くために踏まれるべき手続きは、この条件に適切に当てはまる数を探すために直接的表象を順に代入するというを真に

術的演算の意味を間接的表象から直接的表象へと簡約する手続きとして捉えるという発想は『論研』以前の『算術の哲学』においてすでにフッサールの基本的な立場であった。第六研究のこの箇所は、『論研』時においてもこの点に関してフッサールに本質的な立場の変化がなかったということを示している。この点については、Centrone (2010: 40, 45f., 172)、坂間 (2006) が詳しい。また、このような観点から『論研』を解釈しようとする試みとして三上 (1997)、三上 (1998) をあげることができる。

11. XIX/2: 604 を参照。

12. この点に関して詳しくは XII: 281f. を参照。

なるまで続けるというものである。例えば「 $15 - 11$ 」という表現の場合、 $11 + 1 = 15$, $11 + 1 + 1 = 15$, $11 + 1 + 1 + 1 = 15$, ... というように順に代入してゆき、問題となっている数（この場合であれば「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」の指示対象）を見つけ、「 $15 - 11$ 」→「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」という移行を行えばよい。一般に確定記述と呼ばれる「最小の完全数」や「五番目の素数」といった名辞も、対象が一意に満たすべき条件によってある対象を指示しているという点では同じであり、これらも同様に扱うことができる。

さて、以上において作用の対象である存在者に対する明示的な言及はない。実際、間接的表象から直接的表象に移行する仕方として意味を表示することには、そのような言及の必要性はないだろう。ここで問題となるのは、直接的表象において数そのものが与えられるというフッサールの主張である。もちろんこの主張は、充実化の仕方が表現の対象の与えられ方であると述べるために不可欠である。しかし、この主張は一見したところ、直接的表象が数そのものを指示しているということを通じて見えてくる。もしそうだとすると、上のような意味概念の明確化は、暗黙的に表現の対象となるような存在者へ言及し、それを直接的表象へと割り当てているということになる。すると、上のような意味の記述の枠組みは、結局のところ直接的表象という基本的表現への指示の割り当てに基づいて体系的に各表現に指示を割り当てる指示の理論の一変種であり、またそうであることによって初めて表現の対象を決定する仕方としての意味を表示しているということになる。これは、『論研』の基本方針が暗黙のうちに放棄されていることを意味する。

この問題は次のように表現することもできる。結局のところ、間接的表象を直接的表象へと書き換える仕方が教えてくれるのは、ある間接的表象の対象が、どの直接的表象の対象と同じかということだけであって、対象それ自身ではない。例えば「 $2 \cdot 2$ 」であれば、件の仕方が教えてくれるのは「「 $2 \cdot 2$ 」は「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」が指示するものを指示する」ということだけである。しかし対象それ自体が与えられるということのために必要と思われるのは「「 $2 \cdot 2$ 」は自然数 4 を指示する」ということではないのか。というのも、そうでないのだとすれば、何が「 $2 \cdot 2$ 」の指示対象が、他の存在者ではなく、他ならぬ自然数 4 だということを保証するのだろうか。もしこの点を、直接的表象において数そのものが与えられるという主張が補っているのだとすると、そこで述べられていることは「「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」は自然数 4 を指示する」ということになるだろう。まさにこれは、直接的表象に対して予め一定の存在者を割り当てるということに他ならない。しかしこれは、フッサールの『論研』の基本方針に反する。したがって、例え『論研』のフッサールが、表現の対象を与える仕方としての意味という観念についての明確な把握を持っていたとしても、それは『論研』のフッサールの基本方針を暗黙裏に放棄することによってでしかない。

したがって『論研』の基本方針に則った上で、表現の対象の与えられ方としての

意味という観念の十分に明確な把握を持つことができるかどうかは、次の点にかかってくる。すなわち、直接的表象において数そのものが与えられるということもまた、その指示対象となるような存在者を持ち出すことなく理解できるのかという点が、それである。次節では、そのような理解が可能であることを示し、かつフッサーもまたそのような仕方で理解していたということを示唆する。

2. 直接的表象の意味

本章では、まずは直接的表象の意味理解を、その表象の指示対象に言及することなく明確化できることを示す。具体的には、直接的表象の意味は、任意の二つの直接的表象に関して、その対象の同一性および大小を判定する仕方の把握という観点から明確化されうると論じる。ついで、彼の直接的表象の導入の仕方がそのような仕方の明示化になっていることに基づいて、フッサーもまたこのような仕方で直接的表象の意味を理解していたのではないかということを示唆する。

ここで、元々の課題が表現を理解する作用の志向性の分析であったという点に立ち返ってみよう。まず、直接的表象において対象が与えられるということを前提としておく。私が間接的表象を主語に持つ文「 $2 \cdot 2$ は偶数である」を発話する際に、この発話を私が自然数 4 について何事かを述べること、つまり自然数 4 についての表現理解の作用たらしめているのは、なんだろうか。それはひとえに、私が「 $2 \cdot 2$ 」という表現の意味が分かっているということである。この意味が分かっているということは、乗法の定義を用いた移行の手続きが踏めることと、「2」を「 $1 + 1$ 」に変形する手続きが踏めることによって示されるだろう。これが、「 $2 \cdot 2$ 」という表現の充実化の仕方が分かっているということであり、つまりその意味が分かっているということである。これは逆にいえば、実際に当の手続きを踏めないなどの仕方で、このような仕方が分かっていることが判明した主体に関しては、彼が例え「 $2 \cdot 2$ は偶数である」という音声列を発したとしても、彼が自然数 4 について何事かを述べることができていると我々は考えない。彼は「 $2 \cdot 2$ 」という表現の意味が分かっておらず、彼において「 $2 \cdot 2$ 」という表現を理解する作用は生じていない。逆に言えば、ある主体が「 $2 \cdot 2$ 」という表現の意味、つまり充実化の仕方が分かっているということが、彼が自然数 4 についてこの表現のもとで思考するというを成り立たせている。

では次に、前提されていた直接的表象の理解に移ろう。「 $1 + 1 + 1 + 1$ は偶数である」という発話を他の存在者ではなく、まさに自然数 4 についてのものにするのは何か、というのが現在の問題である。直接的表象、例えば「 $1 + 1 + 1 + 1$ 」の場合、この表現の意味が分かっているということ、その対象が与えられるためにさらに

踏まれるべき手続きの把握として捉えることはできない。なぜなら、直接的表象は、そこに到達することがその対象が与えられることであるような、充実化のプロセスのいわば終点だからである。しかしこのことは、「 $1+1+1+1$ 」という表現の意味理解が問題にならないということではない。むしろ以下で見るように、「 $1+1+1+1$ 」を含む発話をまさに自然数4についてのものたらしめるような、「 $1+1+1+1$ 」という表現の意味を問題にすることが、なお可能である。

このことは、「 $1+1+1+1$ は偶数である」と発話していながら、「 $1+1+1+1$ 」という表現の意味が分かっていないが故に、自然数4について何事かを語っているとはいえないような主体を我々は考えることができることから分かる。そのような主体とは、例えば $1+1+1$ と $1+1+1+1$ のどちらが大きいか（「 $1+1+1 < 1+1+1+1$ 」の真偽）を判定する術を持たないとか、 $1+1+1$ と $1+1+1+1$ が同じか異なるか（「 $1+1+1 = 1+1+1+1$ 」の真偽）を判定する仕方が分からないような主体である。

これは、我々の自然数に関する次のような理解の反映と考えることができる。自然数は無秩序に集められた集まりではなく、1（ないし0）を始点として、一定の順序で無限に整列した存在者である。では、これらの自然数のうち、ある自然数（例えば数4）を他の数ではなくまさにその数たらしめているものはなんだろうか。それは、各々の自然数は、当の順序においてそれらが持つ固有の位置だろう。その位置が異なれば異なる存在者であり、同じであれば同一の存在者である。例えば数4であれば、それがその順序の中の四番目の数であるということが、それを数4たらしめている。さて、問題の順序関係および同一性を判断できないような主体に、我々が「 $1+1+1+1$ 」の理解を帰属しないのは、我々の自然数に関するこのような理解によると考えられる。つまり、「 $1+1+1+1$ 」の対象をそれが問題の順序において位置している場所に基づいて他の自然数、例えば3から区別できているのであれば、自然数3が「 $1+1+1$ 」において与えられた場合に、その両者が異なることが判定できるはずである。逆に言えば、そのような判定ができない主体は、ある表象の対象である自然数を、問題の順序において位置している場所に基づいて他の自然数から区別できていない。

逆に、任意の二つの直接的表象に関して、その対象の同一性および大小を判定する仕方が分かっている主体を考えよう。この場合、その主体が各々の直接的表象の対象が数直線上のある一定の位置にあるということが分かっていると考えてよいように思われる。フッサールが直接的表象において数それ自身が与えられていると述べるときに問題となっている状況は、まさにこのような状況なのではないだろうか。

では、そのような判定ができるということにおいて直接的表象の理解が示されるのだとすると、そのような能力は何によってもたらされるのだろうか。ここで、フ

フッサールが直接的表象を 1 の羅列として導入しているということは、そのような能力をもたらすものの明確化と見ることができる。というのも、もし直接的表象をフッサールのように 1 の羅列で表示したならば、問題の能力をもたらすような手続きが明らかに存在するからである。すなわち、任意の二つの直接的表象が与えられたならば、両者の 1 を同時に消去してゆき、どちらかが余ったらそちらの対象が大きく、余らなかつたならばそれらの対象は等しい、という手続きがそれである。ここで、このような手続きは間接的表象には適用できないが、それを直接的表象にまで引き戻したならば適用できることに注意しよう。つまり、直接的表象は数の同一性ないし順序に関して、間接的表象との対比において、ある特権的な位置にあるのである。再び、ある主体に自然数それ自身が与えられているとフッサールが述べた状況は、まさにこのような状況なのではないだろうか。そして、フッサールが直接的表象を 1 の羅列という形で導入していることのポイントは、そこにおいて以上のような手続きが遂行可能な状態にあるということがまさに表示されているという点にあるのではないだろうか。そうなのだとすれば、フッサールが数名辞の導入するやり方は、彼の意味概念に関する把握が、表現と対象との指示関係に訴えることなく、十分明確なものであったということを示しているように思われる。

以上で、対象を与える仕方としての意味という観念を、表現と対象との間の指示関係を前提することなく、明確化できるとということが示された。次章では、以上の論点が数名辞に限定されるものではないことを確認したい。

3. 経験的言明における間接的表象と直接的表象

本章では、まず第五研究、とりわけ第四章、第五章におけるフッサールの議論へと目を向け、本稿が数名辞に関して確認したのと並行的な区別を彼が経験的言明に現れる名辞に関しても見てとっていたことを確認する (3.1)。次に、経験的言明に現れる名辞に関して直接的表象に対応する名辞としてフッサールが考えていたものが直示詞であることを確認する (3.2)。最後に、経験的言明に現れる名辞に関しても数名辞において確認されたのと同様の方針での分析が可能であることを確認する (3.3)。

3.1 間接的表象としての付加語的名辞

さて、彼が経験的言明の意味と充実化の関係について語っている、第五研究、とりわけ第四章、第五章の議論へと目を向けることとしよう。彼はこの箇所では、彼が付加語的名辞 *attributive Namen* と呼ぶ種類の単称名辞に関する分析を行っている。この付加語的名辞とは、大まかには形容詞を名詞に文法的に的確な仕方で連結することで形成されるような名辞のことであり、基本的には一般に確定記述といわれるも

のに相当する。したがってこれは数名辞においては逆演算に相当するものである。

まずフッサールによれば、付加語的名辞は段階的な構成の歴史を持つ。彼によれば、「全ての付加語的名辞をも含めて、名辞の大部分が、直接または間接に判断から由来した *entsprungen* ことは、疑う余地がない」(XIX/1: 486)。彼によれば、付加語的名辞の意味もまた、元となる判断の意味の一つの「変様 *Modifikation*」(ibid.)であると述べる。つまり、付加語的名辞は表現としても、またその意味においても、判断作用に由来する仕方で構成されたものであるということが出来る。

では、この「由来」や「変様」ということが意味していることは正確には何なのだろうか。フッサールによれば、このことは付加語的名辞の理解は先立って実在する判断作用により可能になっているということとして理解してはならない¹³。この点に関しては、『論研』第一版でも述べられてはいるが、第二版の記述がより明確なので、以下では第二版も適宜参照することとする¹⁴。

結論から言えば、この「由来」や「変様」ということで言われているのは、数学的言明の場合と並行的な事象、すなわちある表現の意味において一定の充実化のためのステップが、その意味の構成の段階を遡るものとして示されていることである。

我々が「*p* である *S* (*das p seiende S*)」(超越数 π) という形式の表象の意味を「実現 *realisieren*」し、そしてその意味を完全に判明かつ本来的に遂行し、かつまたそのような表現によって「思念されているもの」を充実化する証示の道 *der Weg der erfüllunden Ausweisung* を選ぶとすれば、我々はいわば、それに対応する述定的判断に訴えねばならず、その判断を遂行し、名辞的表象を「根源的に」そこから引き出し、成立させ、派生させねばならない。(XIX/1: 488, 第二版)

我々が付加語的名辞の充実化を目指そうとしたとしよう。その際、この表象の意味は、その充実化のためになされなければならないものとして、つまり踏まれるべき手続きとしての判断を遡って示すのである。そして、このような「表象の志向がそれに対応する判断を「遡示」していることや、その表象自身がこの判断の「変様」であることを示していること」(ibid.) は「名辞的、付加語的表象自身の本質内実」

13. 実際、そのような要請は明らかに成り立たない。例えば「日本で一番背の高い人」という名辞を我々は普通に理解することができるが、だからといって我々がこれまでに「この人は日本で一番背が高い」という真なる判断を誰かに対してなしたということにはならない。ここで名辞を構成するために必要なのは、構文論的な知識である。この点に関しては、第四研究の第十一節から第十四節も参照。

14. 第二版では、上記引用箇所「由来した」には引用符がつけられている。また、次のような補足が上のような誤解を避けるために付け加えられている。「ただしここで注意すべきは、「由来した」とか「変様」という言い方は決して経験心理学的および生物学的意味に理解されてはならず、体験の現象学的内実に基づく独特の本質関係を表現しているということである」(XIX/1: 488, 第二版)。

(ibid.) としての表現の意味に「含まれている」(ibid.)。

これに加えて、彼は「したがって現象学的に見れば付加語的表象の本質には、由来とか派生とか、あるいはまた遡示などという言葉で表現されるある一定の間接性 *Mittelbarkeit* が伏在している」(ibid.) と述べる。以上から、フッサールがここに見て取っている事象が、数名辞における間接的表象と平行的なものであることは明らかであると思われる¹⁵。

では、遡示の行き着く先はどこだろうか。それは数学的言明の場合と同様、対象を直接的に名指す表象である。

最後に我々が見出すのは単純な、単一光線的に客観化する諸分枝 [=名辞] であるが、しかしこれらは必ずしも究極的な意味での原始的分枝 *primitive Glieder* ではない。なぜなら単一光線の分枝も名辞化された総合でありうるからである。[...] したがって多かれ少なかれ複雑な遡源性 *Rückbezüglichkeiten* が質料 [=意味] の中に出現し、そしてそれに伴い、固有の仕方に変様されそして間接的である意味において、いろいろな「内含的 *impliziert*」な分節と総合形式がそこに出現することになる。諸分枝がもはや遡源的でなければ、それらはこの点でも単層的である。[...] あらゆる(端的でない)客観化作用の分析は、その作用に包含されている名辞化の中で遡示のステップを追跡する限り、最後には明らかに形式の面でも質料の面でも単層的な、「端的な *schlicht*」作用分枝へ帰着するのである。(XIX/1: 502f., 第二版)

例えば言表文であれば、それは主語と述語へと分節化されている。そのうちの主語表象は、何らかの名辞的表象であろう。しかし、これがもし付加語的名辞であったりした場合、言い換えればそこに遡示という言い方が示すところの間接性を伴う名辞が現れた場合、それはいまだ原始的(つまり直接的)ではない。しかし、我々はその意味にしたがって示される通りに遡ってゆくことで、いつかは「原始的分枝」、「端的な」作用分枝へとたどり着く。その場面において、対象が直接的に名指されることになる。

3.2 直接的表象としての直示詞

では、数名辞における直接的表象に経験的言明において対応するものは、具体的にはなんであろうか。フッサールは、直示詞(を含む指標詞)と、固有名をそのよ

15. 以上では、付加語的名辞が数学的言明における逆演算と平行的に理解されうるということに基づいて議論を進めてきた。フッサールは論じていないが、数学的言明における順演算に並行的な名辞もまた、経験的言明において見出すことができる。何らかの定義によって新しい表現を導入する場合がそれである。数学的言明と経験的言明のどちらの場合でも、そこに出現する名辞の意味を統一的な枠組みで理解できることについては葛谷(2011: chap. 3)を参照。

うなものとして考えていた。そのことは例えば次の引用に現れている。

それゆえ本質的に偶然的な表現 [=直示詞を含む指標詞] は、固有名が固有名本来の意味で機能している限りではあるが、固有名と同類のものであると思われる。なぜなら固有名も対象を「直接」名指すからである。(XIX/2: 555)

ただしフッサールは固有名がその本来の役割を果たすのは直示の場面であり、対象を発話者が直接名指しているのではない場合における固有名の使用は、その「派生的な意味機能 *die abgeleitete Bedeutungsfunktion*」(XIX/2: 555f.) におけるものであると考えていた。したがって、彼がここにおいて対象を直接名指すものとして考えていたのは主に直示詞である。

しかし、数名辞と経験的言明に現れる名辞とは、本質的なところで並行的ではないと述べられるかもしれない。数学的言明に現れる直接的表象とは異なり、「これ」、「あれ」等の直示詞と呼ばれるような表現は、その表現タイプの多様性という観点からすれば非常に限定されている。したがって、対象の同一性を記号としての直示詞に頼って判断することは不可能である。また、間接的表象から直接的表象へと移行する手続きに関しても、数名辞と経験的言明に現れる名辞の間には差異があるように思われる。実際、経験的言明に現れる間接的表象の場合、数学的言明における間接的表象のように、表現に対する手続きを定めるといふ仕方での導入は望み得ない場合がほとんどである。それゆえ、数名辞と経験的言明に現れる名辞の間には、本質的な平行関係はない。

このような批判に対しては、本稿第二章で数名辞に関して述べられたことに本質的な点とは何であったのかを明確にすることで応答できる。直接的表象および直示詞の理解を前提して、間接的表象の場合から考察しよう。充実化の仕方としての意味という考え方に従えば、間接的表象の意味とは、表現の段階的変形を適切に行うために一定の手続きを遂行するために把握されているべきことである。しかしその際、問題の手続きが、当の表現それ自身にのみ向き合っていれば遂行できるようなものであるということは、充実化の仕方としての意味という考え方それ自身にとっては本質的ではない。例えば、「となりの部屋の食卓の上の花瓶」という表現の意味を充実化の仕方として理解した場合、求められている変換は「となりの部屋の食卓の上の花瓶」→「この部屋の食卓の上の花瓶」→「これの上の花瓶」→「これ」というものになるだろう。もちろん各々の表現だけを相手にしているだけでは、この手続きを最初の表現の指示対象が与えられるプロセスとして遂行することはできない。しかし問題の表現を理解している人は、このプロセスを遂行するために何が行われればいいかを分かっているはずである。ここで把握されているのが、充実化の仕方としての意味である。実際に、何が必要かを考えてみよう。フッサールに従えば、この種の間接的な表象の充実化のためには、一定の真なる判断が要求される。これ

は最初の段階の場合であれば、「これはとなりの部屋である」という判断にあたる。したがって、各々の段階を適切に遂行するためには、何らかの直示詞を通じて任意の対象が与えられた際に、それに対して「となりの部屋」、「食卓」、「花瓶」等々の述語が当てはまるかどうかを判定する能力を持っていないなければならない。このような能力によって我々は、直示詞を通じてもたらされる対象の中から、問題の対象をいわば選び出すのである。逆に言えば、こういった能力を含むような一定の能力を持っているということが充実化のための仕方が分かっているということであり、つまり当の間接的表象の意味が分かっているということである。

直示詞において対象が与えられるということに関しても同様である。確かに直示詞の表現タイプは分節化すべき事物に対してあまりにも少ない。しかしこのことは本質的ではない。フッサールによれば、直示詞の意味は、その「一般意味機能 *die allgemeine Bedeutungsfunktion*」(XIX/1: 88) とその発話時の知覚という組み合わせによって与えられる。一般的意味機能とは、例えば「これ」の場合であれば、話し手が指差しているような何かが発話において問題になっているということを一般的に示唆する機能の事である。しかし、直示詞の本来の目標はこのような一般的な事柄ではなく、特定の対象だとフッサールは考える (XIX/2: 558)。彼によれば、直示詞が特定の対象へと関わるということは、発話時の知覚によって実現される。

「この」は本質的に偶因的な表現であり、発話の状況、つまりこの場合なら実際に為された知覚を顧慮することによってのみ、完全な意味を持つ表現である。(XIX/2: 552)

私が「これ」と言い、目の前にある紙を指すとしよう。この小詞はこの対象への関係を知覚に負っている。[...] 私が「これ」という場合、私はただ単に知覚しているのではなく、この知覚に基づいて、この知覚に定位し、その差異をこの知覚に依存する新しい作用が、すなわち、これを思念する作用 *der Akt des Dies-Meinens* が組成されるのである。(XIX/2: 553f.)

例えば暗闇で闇雲に「これ」といっても、それをもって私が何かについて考えているということにはならない。私が「これ」と言いつつ何らかの対象を直接名指しているという場合、そこには知覚による定位が存在する。充実化の仕方としての意味に関して数名辞の直接的表象に関して述べられたのと同様のことが、ここでも当てはまる。ある知覚による定位に基づいた「これは渋谷駅のトレードマークである」という発話が、それが実際に真であるか偽であるかは別として、特定の事物、例えば忠犬ハチ公像について何事かを述べているということ、つまりその発話主体が「これ」の意味をちゃんと分かっているということがいかなることか説明するために、「これこれの知覚による定位に基づいた「これ」は忠犬ハチ公像を指示する」とい

うような指示関係に訴える必要はない。特定の場面での各々の「これ」の意味は、一般に知覚による定位に基づいた直示的同定を行うために主体が分かっていることとして理解できるからである。そしてこの意味の把握は、数名辞の直接的表象の場合と類比的に、任意の知覚による定位に基づいた直示詞の間に主張される、同一性に関する判断および事物を個別化する一定の秩序における関係に関する判断を適切に行える為に必要な能力として解明されうる。

もちろん、そのような能力を明示的にすることが大変骨の折れる作業であることは確かである。また、『論研』においてなされたことが、この課題の完遂にはほど遠いものであることもまた確かである¹⁶。しかし、充実化の仕方としての意味という観点から志向性を分析するという方針に、何か原理的な問題があると考えた理由は見当たらない。したがって、『論研』の基本方針、すなわち、表現の対象の与えられ方としての意味という観念を、表現の対象となるような何らかの存在者への言及なしに明確化することによって、作用の志向性を解明するという方針に、原理的な問題は見当たらない。それゆえ、問題の懸念は払拭された。

(了)

参考文献

Bernet, R., Kern, I., & Marbach, E. *Edmund Husserl. Darstellung seines Denkens*, Felix Meiner, 1996.

Centrone, S. *Logic and Philosophy of Mathematics in the Early Husserl*, Springer, 2010.

Dummett, M. 'Frege's Distinction between Sense and Reference,' reprinted in *Truth and Other Enigmas*, Harvard University Press, 1978, 116–144.

Dummett, M. *Origins of Analytical Philosophy*, Harvard University Press, 1993.

Martin-Löf, P. *Intuitionistic Type Theory*, Bibliopolis, 1984.

(<http://intuitionistic.files.wordpress.com/2010/07/martin-lof-tt.pdf>)

葛谷潤「意味志向の充実化とは何か」、『哲学の探求』, 第 38 号, 哲学若手研究者フォーラム, 2011, 129–145.

坂間毅「フッサール「計算の哲学」の構想について」、『論集』, 第 25 号, 東京大学大学院人文社会系研究科哲学研究室, 2006, 299–308.

富山豊「初期フッサールにおける事態論」、『論集』, 第 27 号, 東京大学大学院人文

16. ベルネが正しく指摘するように、すでに『論研』において、ある事物を知覚的に同定する際に、知覚作用が対象を、現在見えている前面だけでなく背面をも持つような空間的な事物として捉えているということがいかに成立しているかということが、事物知覚の現象学的分析の最も根本的な課題として認識されている (Bernet *et al.* (1996: 109f.)). 『論研』におけるこの課題への取り組みの抱える問題点の批判的な検討としては Bernet *et al.* (1996: 112ff.) を参照。『論研』以降のフッサールの探求、とりわけ『ものと空間』および『イデー II』における彼の探求を、知覚の定位による直示的同定が事物についてのものであると言えるために主体に必要とされる能力の解明として統一的に読み解くことは、今後の課題とせざるを得ない。

- 社会系研究科哲学研究室, 2008, 252-265.
- 「初期・中期フッサールにおける意味概念の動揺」, 『現象学年報』, 第 26 号, 日本現象学会, 2010, 127-134.
- 三上真司「フッサールと实在論の問題 (II)」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』, 第 48 巻第 1 号, 横浜市立大学学術研究会, 1997, 47-81.
- 「フッサールと实在論の問題 (III)」, 『横浜市立大学論叢人文科学系列』, 第 49 巻第 1 号, 横浜市立大学学術研究会, 1998, 71-116.